

No.18

東京文化資源会議

「ティーチャ」

T-Cha

東京文化資源会議

Tokyo Cultural Heritage Alliance

ニューズレター



Michio Ono

Hideaki Shimura

Toshiya Yamamoto

Satoko Funahashi

@ Renovation Town Cooperation

地域の文化を引き継ぐための
各地区のつながり

「東京歴史文化まちづくり連携」

歴史的文化資源を活用したまちづくりのあり方を考えるため、2017年から歴史的資源保存を絡めた累積移転制度に関わる政策提言とその実現を軸とした「リノベーションまちづくり制度研究会」（以下、リノベ研）を発足させ、活動してきました。一方、制度や法規制のような概念的な議論だけでなく、実際にその場所で住まう人たちが、暮らしている現場にも目を向ける必要性も出てきました。

「各地の歴史的文化まちづくりに携わる当事者の方々とともに、保全する側の視点やまちの当事者達が抱える課題などを共有することで、新たな道筋が見えてくると考え、各地で活動する方々と相互連携できる場を模索してきました」（リノベ研PM・小野道生さん）

そこで、リノベーションまちづくりに関する制度提案のみならず、都内各地区の歴史文化まちづくりが直面している課題を包括的に共有・整理しながら、各地の事例をもとに税

制、法規制、資金面、特区との連携など、具体的な制度設計へと深めていく取り組みとして「東京歴史文化まちづくり連携」を立ち上げようということになりました。

歴史文化まちづくり 各地の取り組み

歴史的な長屋が建ち並んでいる中央区月島。昭和元年に建築された長屋を改修し、2003年に開設した「月島長屋学校」は、芝浦工業大学が文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」に採択され、学生達の場所として活用されています。「中央区の区民力レゾジの場所としても使われ、定期的にまちづくり勉強会などの活動が始まりました」(芝浦工業大学教授・志村秀明さん)

まち歩きなどの活動や地域雑誌「佃・月島」を2021年から発行するなど、まちの価値を発信するために学生らとコラボしながら活動をしています。

震災被害を受けなかったことで、今なお、古い長屋や木密地域が残る墨田区の向島や京島では、防災まち



づくりや住環境整備に取り組んできました。「長年、地域住民主体で様々な活動が行われてきました。2000年には向島博覧会など

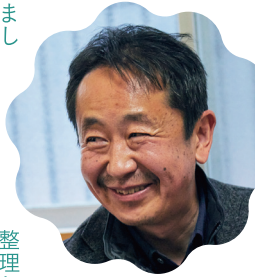
まちづくりとアートのイベントが開催されたほです。次第に空き家に若い人たちが集い始め、2020年にはすみだ向島EXPOが開催されるなど、若い人たちが地域に入り込んで活動が広がっています」と話すのは、NPO法人向島学会 副理事長などを務める山本俊哉(明治大学教授)さん。

江戸時代から、日光街道・奥州街道の宿場町として栄えた千住は、今も多く古民家や蔵など昭和以前の建物や路地が残る地域です。「江戸、明治、大正、昭和と、時代の移り変わりとともにまちは変化してきました。同時に、様々な時代の建物がモザイク状に残っており、多様な歴史や文化が感じられる街並みです」と千住いえまちの舟橋左斗子さんは千住の魅力について語ってくださいました。

「東京歴史文化まちづくり連携」には、こうした各地区で活動されている方々がご参加いただいています。

まちの文化を残す 次なる展開を模索

各地域それぞれ、歴史的な背景や地形、風土、地域固有の問題、地域に関わる人たちなど様々で、一つとして同じアプローチで解決できるも

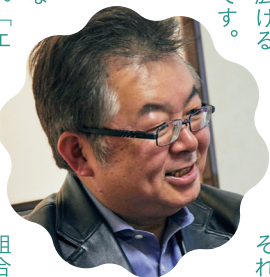


Michio Ono

のではありません。そのなかで、共有するもの、個性のあるものを整理し、アプローチを検討しているところです。

建物保全の一つの方法である登録有形文化財では、建物の減免はなされますが土地は減免になりません。「都心部の月島では、地価の高騰が大きな影響を受けています。相続税や固定資産税への対処が必要です」(志村さん)

また、リノベーションにおける木の活用と耐震性の問題もあり、これらを制度緩和によって広げることも検討すべき事項です。



Hideaki Shimura

古書店街・神保町のまちづくりに関わる山本さん。地価の問題は、都心部の文化的な街並みの継承にも大きな影響を及ぼしています。「エリアの価値のためには、老舗がしっかりと地域に残るとい文化を育む必要があります。市民が主体となつて、そうした場所や建物が重要な資源であると当事者意識を持つ運動はもとより、その次の段階への仕組みを考えていきたいです」(山本さん)

月島、向島・京島、千住でも再開発の波がきており、古い建物が解体されることも増えてきました。「建物そのものはオーナーの所有ですが、街並み全体はまちの文化や価値でもあります。その狭間のなかでより良い選択肢ができるための方法を模索

Toshiya Yamamoto

千住にある昭和4年の創業でキングオブ銭湯と呼ばれた「大黒湯」が2017年7月に閉業しました。地元の人たちも閉まるのを惜しみ、クラウドファンディングなどを通じて部分保存や移築を予定しているとのこと。地元文化を少しでも残すための方法論が求められています。

地域経済を築く 地域をつなぐ

文化的な街並みの継承には、地域経済を盛り立てる人たちが必要です。それぞれの地域でも、若者たちが活躍する場が生まれ、起業する人も増えてきました。一方、起業に必要な資金をどう調達するかが課題です。地元密着の信用金庫や信用組合など、地域金融機関との連携はこれまでリノベ研でも取り組んできましたが、都内各地区の地域金融機関とのさらなる連携も見据える必要があります。

若者だけでなく、その地域に住まう人たちの関係性も生まれています。「長屋には、マンション暮らしの方も来られます。新しいコミュニティを作るのが長屋学校のテーマ。長屋を、歴史的なノスタルジーにするのではなく、若者も含めて色んな人たちをまきこんで、未来に向けた価値を提案しなくては」(志村さん) 町割りを生かした暮らしやすさを

Satoko Funahashi

形にするため、舟橋さんは「#千住暮らし」というウェブサイトで発信にも取り組んでいます。「一人ひとりの暮らしを通して見えてくるまちの魅力を伝えていきたい」と語ります。

まちへの当事者性 未来への価値提案

月島長屋学校のように、大学と連携し若者と地域をつなぎながら、調査や活動を通じて地域の輪が広がることもあり。地道な活動が成果となり、若い人たちを呼び込んだり、文化的な街並みのある暮らしの魅力や価値を届けたりにしていくことが大切です。

「若者も含めて多様な人たちが多様な人たちを呼び込むためのエビデンスを可視化していくことが大切です。当たり前のものに目を向けていくことで、地元の人も十分に認識していかかった価値へとつながります」(山本さん)

街並みをただ保全するのではなく、そこにある暮らしや社会包摂のあり方など、未来への価値をいかにつけていくか。これまでにない新たな視点で発掘することで、地域住民や関係する人たちのまちへの当事者性の向上や愛着(シビックプライド)こそが、街並みの保全や活用へと引き継がれていくのです。その思いをいかにして制度提案へとつなげていくか、今後も模索は続きます。



T-Cha NOW TOKYO PROJECT

東京文化資源会議では、民産官学の様々な分野の専門家や実践者が集い、東京の各地域で育まれている様々な文化資源をハード面・ソフト面から活用するプロジェクトを推進しています。ここでは、東京文化資源会議全体の動向や各プロジェクトの近況をお知らせします。

「いきている街
2045
百路千辻」完成
マスタープラン
策定

地図ファブでは引き続き、2045年の文化資源区について考える社教会堂マスタープランの策定に協力しています。文化資源区から12の場所を選定し、道一つの軸として、2045年の姿を考えるための試みです。マスタープランの名称は「いきている街2045 百路千辻」です。

12地点の未来の姿のデザイン画がほぼ完成、現在は社教会堂に参加されている宗教施設の方々にお話を伺っている段階です。5月5日に開催するひじりばし博覧会では、デザイン画と解説を地図に落とし込み大判印刷したものを掲示して、皆さんと文化資源区の未来について議論をする場を設けます。



「道」を軸とした
2045年のイメージ

回を重ねた
PT
軌跡と
これから

広域秋葉原作戦会議プロジェクトでは、月に一度のペースで定例会議を行っています。定例会議はプロジェクトの核となるもので、活動の内容や方針を議論したり、各種取り組みの進捗を共有したりしています。さらには、メンバー各人のアンテナに引っかけた広域秋葉原エリ



アの情報を交換する場にもなっており、私たちの活動にとって非常に重要なものとなっています。そんな定例会議ですが、2022年1月31日(月)で50回目の開催を迎えました。年月に換算すると、4年と2ヶ月に渡ってプロジェクトを進めて来たことになり、感慨深いものを感じます。さて、50回目となる1月の定例会議では、いつもの会議室(こ最近ではオンラインとのハイブリッド開催ですが)での議論に加え、有志による神田明神参拝というイベントを行いました。新型コロナウイルスは、プロジェクトの活動にも大きな影響を与えていますが、一刻も早い疫病退散とプロジェクトメンバーのさらなる活躍を祈念しました。

地域に
蓄積された
「学び」の場を
改めて
問い直す

湯島神田上野社教会堂研究会は、学術・宗教施設と大学研究者が集まってディスカッションを重ねるなかで、「湯島・神田・上野」に集積されてきた「学び」に注目しています。

宗教施設は信仰の場であると同時に人々が様々な「学び」を行う場でもあり、江戸時代から現代まで、この地にはさまざまな教育・文化・宗教施設が設立され、今日にいたる「学生街」やミュージアム群等が形成されてきました。

この認識を多くの方々と共に、議論をさらに深めていくために、只今、社教会堂塾イベントの開催を二つ予定しています。4月14日にフォーラム「社教会堂塾の可能性…これからの学びの場を考える」、ひじりばし博覧会が開催される5月5日はシンポジウム「学びとは何かー我々は何をどのように学んできたか、そしてこれから? (仮題)」です。詳細は、ウェブサイトやSNSをご覧ください。

神田まちづくり
かわいい指標で
賑わいを可視化

神田まちづくり懇談会は3月8日にオンラインにて懇談会を開催し、地域の方やディベロッパーの方にお集まりいただきました。今回の懇談会では、内神田を対象としたかわいい指標のケーススタディを発表させていただきました。

きました。かわいい指標は、4つのレイヤー概念(基本(人・家族)、町割り、建物、使いこなし)で整理されます。各地区(今回は内神田)ごとに、まちづくりの展開予測(かわいい特性、展開予測)を提示したのち、指標のイメージ(例えば、内神田では奥行きを感じるまちの構成、多様な空間の混在/豊かな混在が引き立ちまち、歩いて楽しいまち、他)や指標一覧を整理しています。参加者の皆様からは、かわいい指標をどのように改善していけば良いかの意見をいただきました。

5月5日のひじりばし博覧会では、内神田のほか、神田駅西口エリア、神田錦町エリアについてのかわいい指標を用意し、より多くの皆様からご意見をいただくワークショップを開催する予定です。





NOW
TOKYO
PROJECT

UNPC
フォーラム開催
これからの
上野公園
調査を踏まえた
活動を

3月17日、第1回上野ナイトパークコンソーシアムフォーラムを開催しました。フォーラムでは、11月から1月までの期間実施した、インターネットを通じた上野公園の利用実態調査や公園に関する意見を収集すると、上野公園や上野地域に関連する地元企業、大学、文化施設、行政機関の方々へのインタビュー調査を行ったものをまとめた内容をご報告いたしました。フォーラムでは、ご報告内容を踏



まえたこれから上野公園のあり方を議論することができました。皆様からいただいたご意見を踏まえ、上野ナイトパークコンソーシアムとして、より具体的な活動へと推進してまいりたいと思います。

文化資源の
博覧会
ひじりばし博
2022
5月5日開催

2022年5月5日、御茶ノ水ソラシティカンファレンスセンターにて「ひじりばし博覧会」を開催いたします。同博覧会は、東京文化資源会議の各PTの活動報告や様々な識者を交えた議論・対話の場を通じ、今後のPTの活動を推進していくためのイベントです。

一昨年は新型コロナウイルス対策としてオンライン飲み会の開催、昨年は、リアルとオンラインを混ぜ合わせたハイブリッド型で開催を予定していましたが、緊急事態宣言下のなか、中止とさせていただきます。今年度は2年ぶりの開催となります。

コロナ禍のなかでも、各PTは着実に活動しています。また、コロナ後の社会や地域のあり方を考え、活動が大きく変化したり動いたりしたPTもありま。コロナ後の社会を考える上で、参考となるコンテンツだと思ひます。ぜひご参加ください。詳細は、ウェブサイトおよびSNSなどで発信いたします。

編集後記

高校生になった息子からまちあるきのコツを教えてほしいというLINEが来ました。どうも地理総合の課題のようです。その作業指示を見てみると東京都心を対象とした課題のようで、都市の機能分化や都市形態・景観などを捉えるというものの他に、台地と低地、堀と河川、江戸城との関係を考えてみようというものがありました。高校生の皆さんは現在の都市の様子やその都市の基礎となっている地形を読み取ることから、江戸の文化にまで思いを巡らせることができるでしょうか。まちの空間と歴史・文化が深く関係しているということに気づけるような機会を多感な高校生が得られるなら、近い将来の彼らの時代はより豊かな文化が溢れた街になっていくことでしょう。(陸)

春めいてきてきて、暖かい陽気とともに、桜並木を散歩するのが楽しい時期となりました。そして、新型コロナウイルスが広がってから3回目の春となり、生活や仕事のあり方が改めて大きく変わったことに気づかされます。世界情勢の不安も相まって、落ち着いた日々ではないかもしれません。そうした時こそ、足元の生活を見直し、整えることで気持ちを落ち着かせることができます。心機一転、年度の明けたタイミングだからこそ、自分の身の回りを整理整頓してみてはいかがでしょうか。(江)



[ティーチャ]東京文化資源会議ニューズレター No.18

読み、旨み、味わいのある東京の文化資源的エキスを3ヶ月に一度、お届けします。

編集：東京文化資源会議広報委員会 デザイン：波井史生(PANKEY inc.) 執筆：江口晋太郎(TOKYObeta Ltd.)

写真：鈴木渉 印刷・製本：スタート出版株式会社 発行人：東京文化資源会議 発行日：2022年3月31日

〒110-0005 東京都台東区上野2-11-1藤井ビル3階 TEL：03-5244-5450 MAIL：info@tcha.jp URL：http://tcha.jp/

